

日蓮大聖人御書全集

けんぶつみらいき

顕仏未来記

新版
606
ゝ
612

けんぶつ みらい き

顕仏未来記

ぶんえい ねん うるう がつ にち

文永 10 年 ('73) 閏 5 月 11 日 52 歳 さい

しゃもん にちれん かんが

沙門日蓮これを勘う。

ほけきよう だいしち い われめつど のち のち ごひやくさい なか

法華經の第七に云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、

えんぶだい こうせんる ふ だんぜつ とううんぬん

閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなかれ」等云々。

よ ひと なげ い ほとけ めつ ご すで

予、一たびは歎いて云わく、仏の滅後既に

にせんにひやくにじゅうよねん へだ ざいごう ほとけ

二千二百二十余年を隔つ。いかなる罪業によつて、仏の

ざいせ う しょうほう し え ぞうほう なか てんだい でんぎようとう

在世に生まれず、正法の四依、像法の中の天台・伝教等に

あ

も値わざるやと。

ひと

よろこ

い

さいわ

のち

また一たびは喜んで云わく、いかなる幸いあつて、後の

ごひやくさい

う

しんもん

はいけん

五百歳に生まれてこの真文を拝見することぞや。

ざいせ むやく

ぜんしみ

ひと

ほけきよう

き

在世も無益なり。前四味の人はいまだ法華経を聞かず。

しょうぞう

よしな

なんさんほくしち

けごん

しんごんとう

がくしゃ

正像もまた由無し。南三北七ならびに華嚴・真言等の学者

ほけきよう

しん

てんだいだいしい

のち

ごひやくさい

とお

みようどう

は法華経を信ぜず。天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道

うるお

とううんぬん

こうせんるふ

とき

さ

でんぎようだいしい

に沾わん」等云々。広宣流布の時を指すか。伝教大師云わ

しょうぞう

す

お

まつぼう

ちか

あ

とう

く「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ近きに有り」等

うんぬん

まつぼう

はじ

がんぎよう

ことば

じだい

かほう

云々。末法の始めを願樂するの言なり。時代をもつて果報

ろん

りゆうじゆ

てんじん

ちようか

てんだい

でんぎよう

すぐ

を論ずれば、竜樹・天親に超過し、天台・伝教にも勝る

るなり。

と い のち ごひやくさい なんじいちにん かぎ なん こと
問うて云わく、「後の五百歳」は汝一人に限らず。何ぞ殊

にこれを喜悦せしむるや。

こた い ほけきよう だいし い によらい げん いま
答えて云わく、法華經の第四に云わく「如来の現に在す

すらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」文。天台大師

い 云わく「いかにいわんや未来をや。理、化し難きに在るな

り」文。妙樂大師云わく「『理、化し難きに在り』とは、

この理を明かすことは、意、衆生の化し難きを知らしむ

るに在り」文。智度法師云わく「俗に良薬口に苦しと言う

きよう ぎじよう いしゅう はい いちごく げんしゅう た

がごとく、この経は五乗の異執を廃して一極の玄宗を立

ゆえ ぼん しりぞ しょう か だい はい しょう は ないし

つ。故に、凡を斥け聖を呵し、大を排し小を破す乃至か

やから るなん とううんぬん

くのごときの徒、ことごとく留難をなす」等云々。

でんぎようだいしい よ かた すなわ ぞう お まつ はじ

伝教大師云わく「代を語れば則ち像の終わり末の始め、

ち たず とう ひがし かつ にし ひと たず すなわ ぎじよく

地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の

しょう とうじよう とき きよう い おんしつおお

生・鬭諍の時なり。経に云わく『なお怨嫉多し。いわん

めつど のち ことば まこと ゆえあ とううんぬん

や滅度して後をや』。この言、良に以有るなり」等云々。

でんぎようだいしい ひつせき とき あ に ころ

この伝教大師の筆跡は、その時に当たるに似たれども、意

とうじ さ しょうぞう す お まっぼう

は当時を指すなり。「正像やや過ぎ已わって、末法はなは

だ近きに有り」の釈は、心有るかな。

きよう い あくま まみん しよてん りゆう やしや くはんだとう
経に云わく「悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等、

その便りを得ん」。言うところの「等」とは、この経にま

た云わく「もしは夜叉、もしは羅刹、もしは餓鬼、もしは

富単那、もしは吉遮、もしは毘陀羅、もしは犍駄、もしは

烏摩勒伽、もしは阿跋摩羅、もしは夜叉吉遮、もしは人吉遮」

等云々。この文のごときは、先生に四味三教乃至外道・

人天等の法を持得して、今生に悪魔・諸天・諸人等の身を

受けたる者が、円実の行者を見聞して留難を至すべき由を

と
説くなり。

疑うたがつて云いわく、正像しょうぞうの二時にじを末法まつぽうに相對あいたいするに、時ときと機き
と共ともに正像しょうぞうは殊ことに勝すぐるるなり。何なんぞ、その時機じきを捨すてて、
ひとえに当時とうじを指さすや。

答こたえて云いわく、仏意測ぶついはかり難がたし。予よいまだこれを得えず。試こころ

みに一義いちぎを案あんじ、小乗經しょうじょうきやうをもつてこれを勘かんうるに、

正法千年しょうほうせんねんは教きやう・行ぎやう・証しょうの三つ、つぶさにこれを備そなう。像法ぞうほう

千年せんねんには教きやう・行ぎやうのみ有あつて証無しょうなし。末法まつぽうには教きやうのみ有あつ

て行ぎやう・証無しょうなし等云々とううんぬん。

ほけきよう

さぐ

しょうほうせんねん

さんじ

ぐ

法華經をもつてこれを探るに、正法千年に三事を具する

ざいせ

ほけきよう

けちえん

もの

のち

しょうほう

う

は、在世において法華經に結縁する者、その後、正法に生

しょうじよう

きよう

ぎよう

えん

しょうじよう

しょう

まれて小乗の教・行をもつて縁となし、小乗の証を

え

ぞうほう

ざいせ

けちえん

びはく

ゆえ

しょうじよう

得るなり。像法においては、在世の結縁微薄の故に小乗に

しょう

ひと

ごんだいじよう

えん

おいて証することなく、この人、権大乘をもつて縁とな

じつぽう

じようど

しょう

まつぽう

だいしろう

やくとも

して十方の浄土に生ず。末法においては、大小の益共に

な

しょうじよう

きよう

あ

ぎよう

しょうな

だいじよう

これ無し。小乗には、教のみ有つて行・証無し。大乘

きよう

ぎよう

あ

みよう

けん

しょう

な

には、教・行のみ有つて冥・顕の証これ無し。

うえ

しょうぞう

とき

た

ごん

しょう

にしゅう

ぜんぜん

その上、正像の時に立つるところの権・小の二宗、漸々

まっぼう い しゅうしん じょうじょう しょう
に末法に入つて執心いよいよ強盛にして、小をもつて大
う ごん じつ やぶ こくど だいたいほうぼう ものじゅうまん
を打ち、権をもつて実を破り、国土に大体謗法の者充満す
るなり。

ぶつきよう あくどう お もの だいちみじん おお
仏教によつて惡道に墮つる者は大地微塵よりも多く、
しょうほう ぎよう ぶつどう え もの そうじよう つち すく
正法を行じて仏道を得る者は爪上の土よりも少なきな
り。

とき あ しょうぜんじん くに しゃり じゃてん
この時に当たつて、諸天善神その国を捨離し、ただ邪天・
じゃきとう あ おうしん びく びく にとう しんしん にゅうじゅう
邪鬼等のみ有つて王臣・比丘・比丘尼等の身心に入住し、
ほけきよう ぎようじや めり きにく とき
法華經の行者を罵詈・毀辱せしむべき時なり。

ほとけ めつご

しみさんぎようとう

しかりといえども、仏の滅後において、四味三教等の

じやしゅう

す

じつだいじよう

ほけきよう

き

しよてんぜんじん

邪執を捨てて実大乘の法華經に帰せば、諸天善神ならび

じゆせんがいとう

ぼさつ

ほつけ

ぎようじや

しゆご

ひと

に地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護せん。この人は、

しゆご

ちから

え

ほんもん

ほんぞん

みようほうれんげきよう

ごじ

守護の力を得て、本門の本尊・妙法蓮華經の五字をもつ

えんぶだい

こうせんるふ

て閻浮提に広宣流布せしめんか。

れい

いおんのうぶつ

ぞうほう

とき

ふきようぼさつ

がじんきよう

われ

ふか

例せば、威音王仏の像法の時、不輕菩薩「我深敬（我は深

うやま

とう

にじゅうしじ

か

ど

こうせんるふ

いっこく

く敬う」等の二十四字をもつて彼の土に広宣流布し、一国

じようぼくとう

だいなん

まね

の杖木等の大難を招きしがごとし。

か

にじゅうしじ

ごじ

ことば

彼の二十四字とこの五字とは、その語殊なりといえども、

その意これ同じ。彼の像法の末とこの末法の初めとは、全
く同じ。彼の不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字の凡夫な
り。

疑つて云わく、何をもつてかこれを知る、汝を末法の初
めの法華經の行者となすことを。

答えて云わく、法華經に云わく「いわんや滅度して後を
や」。また云わく「諸の無智の人の、惡口・罵詈等し、お
よび刀杖を加うる者有らん」。また云わく「しばしば擯出せ
られん」。また云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」。

じようもく がしやく

ちようちやく

また云わく「杖木・瓦石をもつて、これを打擲す」。ま

い あくま まみん しよてん りゆう やしや くはんだとう

た云わく「悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等、その

たよ え とううんぬん

便りを得ん」等云々。

みようきよう つ ぶつご しん

にほん

この明鏡に付いて、仏語を信ぜしめんがために日本

こくじゅう おうしん ししゆ めんぼく ひ む よ ほか

国中の王臣・四衆の面目に引き向かえたるに、予よりの外

いちにん な とき ろん まつぼう はじ いちじよう

には一人もこれ無し。時を論ずれば、末法の初め一定なり。

にちれんな ぶつご こもう な

しかるあいだ、もし日蓮無くんば仏語は虚妄と成らん。

なん い なんじ だいまん ほつし だいてん す し

難じて云わく、汝は大慢の法師にして、大天に過ぎ、四

ぜんびく こ

禅比丘にも超えたり、いかん。

こた

い

なんじにちれん

べつじよ

じゅうざい

だいばだつた

答えて云わく、汝日蓮を蔑如するの重罪、また提婆達多

す

むくろんじ

こ

わ

ことば

だいまん

に

に過ぎ、無垢論師にも超えたり。我が言は大慢に似たれど

ぶつき

たす

によらい

じつご

あらわ

も、仏記を扶け如来の実語を顕さんがためなり。しかりと

にほんこくじゅう

にちれん

のぞ

さ

たればと

と

い

いえども、日本国中に日蓮を除き去つては誰人を取り出だ

ほけきよう

ぎようじや

なんじ

にちれん

そし

ぶつき

して法華經の行者となさん。汝、日蓮を謗らんとしして仏記

こもう

だいあくにん

を虚妄にす。あに大悪人にあらずや。

うたが

い

によらい

みらいき

なんじ

あいあ

疑つて云わく、如来の未来記、汝に相当たれり。ただ

ごてんじく

かんどとう

ほけきよう

ぎようじや

あ

し、五天竺ならびに漢土等にも法華經の行者これ有るか、

いかん。

こた い してんげ なか まった ふた ひな しかい
答えて云わく、四天下の中に全く二つの日無し。四海の

うち りようしゅ あ
内、あに両主有らんや。

うたが い なに なんじ し
疑つて云わく、何をもつて汝これを知る。

こた い つき にし い ひがし て ひ ひがし
答えて云わく、月は西より出でて東を照らし、日は東よ

い にし て ぶつぽう
り出でて西を照らす。仏法もまたもつてかくのごとし。

しょうぞう にし ひがし む まつぽう ひがし にし ゆ
正像には西より東に向かい、末法には東より西に往く。

みようらくだいし い ちゅうごく ほう うしな しい
妙楽大師云わく「あに中国に法を失つてこれを四維に

もと どううんぬん てんじく ぶつぽう な しょうもん かんど
求むるにあらずや」等云々。天竺に仏法無き証文なり。漢土

こうそう こうてい とき ほくてき どうけい りよう いま
において高宗皇帝の時、北狄、東京を領して、今に

いっぴやくごじゅうよねん ぶつぼう おうぼうとも つ お かんど だいぞう

一百五十余年、仏法・王法共に尽き了わんぬ。漢土の大蔵の

なか しょうじょうきよう いっこう な だいじょうきよう たぶん うしな

中に、小乗経は一向これ無く、大乘経は多分これを失

にほん じゃくしょうとうしょうしょう わた

う。日本より寂照等少々これを渡す。

でんじ ひとな ぼくせき えはつ

しかりといえども、伝持の人無ければ、なお木石の衣鉢を

たいじ ゆえ じゅんしきい はじ にし つた

帯持せるがごとし。故に、遵式云わく「始め西より伝う。

つき しょう いま ひがし かえ

なお月の生ずるがごとし。今また東より返る。なお日の昇

とううんぬん しゃく てんじく かんど

るがごとし」等云々。これらの釈のごとくんば、天竺・漢土

ぶつぼう うしな もちろん

において仏法を失えること勿論なり。

と い がっし かんど ぶつぼうな

問うて云わく、月氏・漢土において仏法無きことは、こ

れしを知れり。東・西・北の三州に仏法無きことは、何なにを

もつてこれを知るし。

答えて云わく、法華經の第八に云わく「如来滅して後のちに

おいて、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらし

めん」等云々。「内」の字は三州を嫌う文なり。

問うて曰わく、仏記既にかくのごとし。汝が未来記なんじ みらいきいか

ん。

答えて曰わく、仏記に順じてこれを勘うるに、既に後のちの

五百歳の始めに相当たれり。仏法必ず東土の日本より出いず

べきなり。

ぜんそう

かなら

しょうぞう

ちようか

てんぺんちよう

あ

その前相、必ず正像に超過せる天変地天これ有るか。

ぶつしょう

とき

てんぽうりん

とき

にゆうねはん

とき

きちずい

きよう

いわゆる、仏生の時、転法輪の時、入涅槃の時、吉瑞・凶

ずいとも

ぜんご

た

だいずい

ほとけ

しょうにん

ほん

瑞共に前後に絶えたる大瑞なり。仏はこれ聖人の本なり。

きようぎよう

もん

み

ほとけ

ごたんじよう

とき

ごしき

こうきしほう

経々の文を見るに、仏の御誕生の時は、五色の光気四方

あまね

よる

ひる

ほとけごにゆうめつ

とき

じゆうに

に遍くして、夜も昼のごとし。仏御入滅の時には、十二の

はっこうなんぼく

わた

だいにちりんひかりな

やみよ

のち

白虹南北に亘り、大日輪光無くして闇夜のごとし。その後、

しょうぞうにせんねん

あいだ

ないげ

しょうにんしょうめつあ

正像二千年の間、内外の聖人生滅有りしかども、この

だいずい

い

しょうかねんちゆう

ことし

いた

大瑞にはしかず。しかるに、去ぬる正嘉年中より今年に至

おおじしん

だいてんぺん

ぶつだ

るまで、あるいは大地震、あるいは大天変、あたかも仏陀の

しょうめつ とき

まさ し

ほとけ

しょうにんう

生滅の時のごとし。当に知るべし、仏のごとき聖人生ま

めつ

おおぞら わた

だいすいせい

れたまわんか、滅したまわんか。大虚に亘って大彗星出ず。

たれ おうしん

たい

だいち

けいどう

み

誰の王臣をもつてこれに対せん。大地を傾動して三たび

しんれつ

しょうけん

おお

まさ

し

振裂す。いずれの聖賢をもつてこれを課せん。当に知るべ

つうず

せけん

きつきよう

だいずい

し、通途の世間の吉凶の大瑞にはあらざるべし。これひと

だいほうこうはい

だいずい

えに、この大法興廢の大瑞なり。

てんだい

あめ

たけ

み

りゆう

だい

し

はな

さか

天台云わく「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛

み

いけ

ふか

し

とううんぬん

みようらくい

ちじん

んなるを見て池の深きを知る」等云々。妙楽云わく「智人

は起きを知り、蛇じやは自ら蛇みづかを識じやる」等云々。とううんぬん

にちれん

どうり

そん

すで

にじゅういちねん

ひごろ

さい

つきごろ

日蓮この道理を存して既に二十一年なり。日来の災、月来

なん

りようさんねん

あいだ

こと

すで

しぎい

およ

ことし

の難、この両三年の間の事、既に死罪に及ばんとす。今年

こんげつ

まん

いち

のが

がた

しんみよう

よ

ひと

うたが

今月、万が一も脱れ難き身命なり。世の人、疑いあらば、

いさい

でし

と

委細のことは弟子にこれを問え。

さいわ

いつしよう

うち

むし

ほうぼう

しようめつ

幸いなるかな、一生の内に無始の謗法を消滅せんこと

よろこ

けんもん

きようしゆしやくそん

つか

を。悦ばしいかな、いまだ見聞せざる教主釈尊に侍え

たつまる

奉らんことよ。

ねが

われ

そん

こくしゆとう

さいしよ

みちび

願わくは、我を損ずる国主等をば、最初にこれを導かん。

われ たす で しとう しやくそん もう われ う

我を扶くる弟子等をば、釈尊にこれを申さん。我を生める

ふ ぼとう し いぜん だいぜん まい

父母等には、いまだ死せざる已前にこの大善を進らせん。

いま ゆめ ほうとうほん こころ え きよう

ただし、今、夢のごとく宝塔品の心を得たり。この経に

い しゆみ と たほう むしゆ ぶつど な お

云わく「もし須弥を接つて、他方の無数の仏土に擲げ置か

かた ないし ほとけめつ のち あくせ

んも、またいまだ難しとなさず乃至もし仏滅して後、悪世

なか よ きよう と すなわ かた

の中において、能くこの経を説かば、これは則ち難しと

とううんぬん でんぎようだいしい あさ やす ふか かた

なす」等云々。伝教大師云わく「浅きは易く深きは難しと

しゃか しゃはん あさ さ ふか じようぶ こころ

は、釈迦の所判なり。浅きを去つて深きに就くは、丈夫の心

てんだいだいし しゃか しんじゆん ほつけしゆう たす しんたん ふよう

なり。天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚

し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通

えいざん

いつけ

てんだい

そうじよう

ほつけしゆう

たす

にほん

ぐつう

す」等云々。安州の日蓮は、恐らくは、三師に相承し、

とううんぬん

あんしゆう

にちれん

おそ

さんし

そうじよう

ほつけしゆう

たす

まつぼう

るつう

さん

いち

くわ

さんごくし

し

法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加えて三国四師と

な

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

号づく。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

ぶんえいじゆうねんたいさいみずのとりのちのごがつじゆういちにち

文永十年太歳癸酉後五月十一日

にちれん

しる

日蓮これを記す。

桑門

そうもん